

今日のところに入る前に、二つのことを予備知識として知っておきたい。

一つは、「祭り」である。

このヨハネによる福音書には他の福音書と比べ、「祭り」が沢山でてくる。最初に出てくるのは、2章のカナの婚礼の直後で、「ユダヤ人の過越祭が近づいたので、イエスはエルサレムへ上って行かれた」とある。そして、6章4節に再び年に一回の「過越祭」がまた近づいていたと記され、今日の箇所では、春の過越祭に対して、秋に祝われる「仮庵祭が近づいていた」と言われている。以後、10章22節に「神殿奉献祭」という祭が言及され、12章に、再び「過越祭」近づいたと記されている。

「祭り」によって、主イエスの活動が区切られており、その3回目の過越祭、あの出エジプトという救済の出来事を記念する祭りの中で、主イエスは世の罪を取り除いて罪人に永遠の命を与える救いの御業を、十字架と復活を通して成し遂げていかれることになる。

その祭りに関して、7章に限定すると、2節に「ユダヤ人の仮庵祭が近づいていた」とあり、14節に「祭りも既に半ばになったころ」とあり、37節に「祭が最も盛大に祝われる終わりの日に」と記されている。こういう時の区切りの中で、主イエスとその兄弟、そしてユダヤ人、また群衆との間の不思議な対話が繰り返されていき、そのことを通して、主イエスが誰であるかが明らかになっていく。しかし、そのことが明らかになるにつれて主イエスに対する「ユダヤ人」の激しい敵意が生まれ、群衆の中でも主イエスが誰であるかについての認識のずれ、対立が生じていくことにもなる。

二つ目は、6節と8節に出てくる「わたしの時」という言葉である。

ヨハネによる福音書では、2章のカナの婚礼のとき、主イエスの母が主イエスに「ぶどう酒がなくなりました」と言ったとき、主イエスは「婦人よ、わたしとどんな関わりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません」とお答えになった。次は、本日の6節と8節。この後は、7章30節と8章20節に「イエスの時はまだ来ていなかった」と同じ言葉が出てくる。そして、受難物語が始まる直前の12章23節に「人の子が栄光を受ける時が来た」と出てきて、以後、「イエスはこの世から父の許へ移るご自分の時が来たことを悟り」とか、「父よ、時が来ました」という主イエスの祈りの言葉の中に出てくる。

「わたしの時」「イエスの時」とは何であるか。それが「来る」とはどういうことなのか？

1節。「その後、イエスはガリラヤを巡っておられた。ユダヤ人が殺そうとねらっていたので、ユダヤを巡ろうとは思われなかった。」

何回か言及しているが、ヨハネ福音書に出てくる「ユダヤ人」とは、主にユダヤ地方、特にエルサレムに住むユダヤ教の権力者たちのことである場合が多いが、彼らは既に5章

18 節の段階で、「**ますますイエスを殺そうと狙うようになった**」とある。その理由は、主イエスが、働いてはならないとユダヤ教の律法で決められている安息日に、38 年間に病気で苦しんでいた病人を立ち上がらせるという業をされたことにある。しかし、それは表向きの理由で、実際には、自分たちでは決してなし得ない圧倒的な業をする人間を抹殺しないことには、自分たちの宗教的権威が失墜するという恐怖、自己防衛本能による憎しみがある。

主イエスは、そういう憎しみ溢れるユダヤ地方を離れて、故郷のガリラヤに帰り、その地で、大いなるしるしをなさっていた。しかし、6 章の最後で明らかになったように、そのしるしと主イエスの言葉によって、主イエスが誰であるか明らかになればなるほど、ガリラヤの群衆も離れ去り、弟子たちの多くもまた離れ去っていったのである。それでも、主イエスは過越祭の春からその年の秋まではガリラヤで活動をなさっていたことになる。

2－5 節。「**ときに、ユダヤ人の仮庵祭が近づいていた。イエスの兄弟たちが言った。『ここを去ってユダヤに行き、あなたのしている業を弟子たちにも見せてやりなさい。公に知られようとしながら、ひそかに行動するような人はいない。こういうことをしているからには、自分を世にはっきり示しなさい。』兄弟たちも、イエスを信じていなかったのである。**」

「**仮庵祭**」に関しては、聖書の後ろの付録にある「用語解説」の当該欄を参照。この祭りにおいては重要なのは「**水**」である（7 章 37—39 節参照）。

主イエスの兄弟というのは 2 章でも一言だけ出てくるが、マルコ福音書(3:31 以下など)においても、主イエスを理解していない人間という形で出てくる。ここでも但し書きを見るとそうになっている。でも、この兄弟たちの言葉は、一見するだけなら、主イエスに好意的であり、マルコ福音書のように、あの男は気が狂っているという評判を聞いて家に連れ戻しに来たという感じとは正反対である。むしろ、主イエスの業を見て、自分の兄貴は只者ではないと思っており、仮庵の祭りで興奮と熱狂の中にいる人々の前で、癒しの業やパンの奇跡などを見せてやれば、一気に王の位に上り詰めることが出来るのに・・・という期待を込めた言葉だと思う。

兄弟たちが抱いている期待は、一般的な意味では、主イエスへの信仰と言ってもよいと思う。パンを食べて満腹した群衆が、主イエスを「**王**」として祭り上げようとしたのも一つの信仰と言えるから。でも、2 章の後半に、「**そのなさったしるしを見て、多くの人がイエスの名を信じた。しかし、イエスご自身は彼らを信用されなかった。それは、すべての人のことを知っておられ・・・何が人間の心の中にあるかを知っておられたのである**」とあるように、人間が信仰だと思っていることが、主イエスから見ると信仰でも何でもない、自分勝手の願望、自分の利益を求める欲望に過ぎないことがあまりに多い。

6 節. 「そこでイエスは言われた。『わたしの時はまだ来ていない。しかし、あなたがたの時はいつも備えられている。』」

この言葉は、主イエスの活動はすべて主イエスをお遣わしになった神様の意思に従ってのことであり、ご自分の思いに従ってのことではない、まして人の願いに応える形でのものではあり得ないということを行っているのであろう。そして、ユダヤ地方、それもエルサレムに行くということは、実際には殺されに行くようなものである。そのこと自体、主イエスは心の最も深い所で覚悟をし、受け止めておられていたであろう。しかし、今はまだその時ではない。

その一方で、人間は、いつでも自分の思いに従って行動するものである。神様の召しに従うとか、命令に従って、留まるときは留まる、行かねばならぬときは嫌でも行く。そういうことはない。それが、「あなたがたの時はいつも備えられている」という言葉の意味ではないだろうか。

7-8 節 a. 「世はあなたがたを憎むことができないが、わたしを憎んでいる。わたしが、世の行っている業は悪いと証しているからだ。あなたがたは祭りに上って行くがよい。」

主イエスは世の憎しみを肌身で感じておられる。誰だって、憎まれたくはないはず。しかし、主イエスは憎まれている。何故なら、主イエスが「世の行っている業は悪いと証しているから」。ヨハネにおける「世」とは私たち一人一人の人間のことである。神様の命令に従うことを拒否して、自分たちの思いのままに生きている私たち人間のことである。

8 節 b - 9 節. 「『わたしはこの祭りには上って行かない。まだ、わたしの時が来ていないからである。』 こう言って、イエスはガリラヤにとどまられた。」

しかし、この後の 10 節には、「しかし、兄弟たちが祭りに上って行ったとき、イエス御自身も、人目を避け、隠れるようにして上って行かれた」ある。

この 8 節後半から 10 節までの記述におけるコントラストは、2 章のあのカナの婚礼の記事と似ていると言える。そこで主イエスは、母に促されたことを拒否した直後に、水をぶどう酒に変えるという業をなさる。ここでも兄弟たちの促しを拒否した直後に、祭りに上って行かれる。そこで語られていることの一つは、主イエスの行動のすべてが人の求めに応じるものではなく、神様の求めに応じるものだけということであろう。

最後に、「わたしの時はまだ来ていない」という言葉について。

ここに出てくる「時」という言葉は、「カイロス」(καιρός) で、「神様が定める時」を意味する。

次に「来る」という言葉だが、今日の箇所には 2 度出てくる「わたしの時はまだ来ていない」(6, 8 節) の違いについては触れておきたい。

最初の6節に出てくる「来ていない」は、「パレイミ」(πάρεμι)という言葉を否定する形であるが、パレイミとは「ここに存在する」という意味で現在形である。

次の8節の「来ていない」(プレロオー、πληρώ)は完了形で、これは「実現する、満たす」という意味の言葉の前に否定語(ούπω、ウーポー、「まだ~ない」)がついていて、主イエスが地上に来てから今日まで、神様が定めた時がまだ実現していない、満たされていない、まだ来ていない、そういう意味で、主イエスは語られているのだと思われる。

その「時」は、いつ来るのか。またいつ満たされるのか。それは主イエスが十字架に磔され死んだときである。十字架に架かっておられる主イエスは、服をはぎ取られて磔されていたのだが、その十字架の真下で、ローマの兵士たちが剥ぎ取ったその服をくじ引きで誰のものとするかを定める場面があるが、そこには、**『彼らはわたしの服を分け合い、わたしの衣服のことでくじを引いた』という聖書の言葉が実現するためであった**

(19:24)と記されている。この「実現する」という言葉が、「わたしの時が来ていない」の「来る」と同じ言葉(プレロオー)が使われている。

もう一箇所、主イエスが十字架上で息を引き取られた後、足の骨が砕かれないということもまた**「聖書の言葉が実現するためであった」**(19:36)とある。

主イエスの時は、この十字架上での死を通して、満たされ、実現される。